



外国にルーツをもつ子どもの支援をする学生グループ「帰国渡日児童生徒つながる会」のメンバーと



若者×多文化共生

今、多文化が共生する ということ

伏見青少年活動センター

「多文化共生」のその先を目指して

「多文化共生」ということばが使われるようになったのは、在住外国人が急増した90年代です。それからずいぶん長い時間が経ちました。2006年、総務省「多文化共生の推進に関する研究会報告書」の中では、多文化共生は「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されています。

いまこの原稿を作成している2016年は、それから10年目に当

りますが、外国人受け入れの新たな曲がり角となる年でもありました。外国人労働者は100万人を超えました（推計）。また、人手の不足する介護現場での外国人の受け入れについては、これまではEPA（経済協力協定）の下であるいは新日系人と呼ばれるフィリピンにルーツを持つ人を中心に行われてきました。今回あらたに在留資格にも技能実習の職種にも「介護」が加えられ、さらなる外国人材の受け入れが期待されています。

外国人受け入れ促進の地ならしも進んでいます。いわゆる「ヘイトスピーチ対策法」が成立し、外国人に対する差別的言動に対して初めての法的な規制が課されました。また、外国人に対する日本語教育を充実させることを目指して、超党派の国会議員が「日本語教育推進議員連盟」を発足させました。

振り返ってみると、1980年代

に留学生やエンターテイナー、90年代に日系人の受け入れが増えたとき、日本社会はそういった人たちが一人、ライフ（生命・人生・生活）をもつ存在であることを十分には認識していなかったと言えます。実際には、受け入れた人々は日本で仕事に就き、家族を呼び寄せたり、家族を作ったりして、いまや「生活者」として経済的にも社会的にも日本を支える重要な一員となっています。この我々の認識と実際のずれによって、多くの問題が生じています。

新たな曲がり角に立つ今、我々は足元のこの京都の多文化共生がどのような状況にあるのかを見直す必要があります。そして、曲がり角の先を見据え、これから目指す社会づくりにおいて「多文化が共生する」というスローガンだけで十分なのかをあらためて議論することが迫られているのではないかと思います。



京都教育大学 国文学科 浜田 麻里 教授

今、多文化が共生する というところ

キーパーソン

1

公益財団法人 京都市国際交流協会
事業課 情報サービス係 担当係長

濱屋 伸子氏



京都市には留学生が多く、学部生以外にも若手研究者が家族を伴って来日し、京都で出産や子育てを経験されているケースも少なくありません。医療通訳派遣事業や行政通訳相談事業といった、通訳者による言葉のサポートを行う事業から、そうした人たちの課題や問題も多岐にわたることが見えてきました。日本語によるコミュニケーションが十分でない人にとっては、通訳による言葉のサポートはとても重要です。

●支援を深め、 広げるためのネットワーク

ただ、私たちが提供している言葉のサポートは、必要なところへ「つながり」ことがメインで、直接的な支援は難しい。だからこそ、私たちが自身がさまざまな団体や人たちと広くつながっていることが大事だと思い、京都市域の外国人のサポートに関わる団体・個人が参加する「きょうと多文化支援ネットワーク」などにも関わっています。

通訳によってサポートできるのはごく一部。通訳者がいれば全ての問題が解決できるということにはならないです。いろいろな人が自分の状況や希望にあわせて日本語を勉強できる場はもっとたくさんあっていいのかなと思っています。たとえば、子育て中の方だったら、子ども連れで勉強ができたり、他の親子との交流なんかもある日本語学習の場へのニーズは高いと思います。そこ



で友達ができることで、結果的に子育ての支援にもなってくると思います。

●世界と出会い、広がる自分

Kokuka（国際交流会館）で開催している、乳幼児と保護者の居場所づくりの活動「ホッとチャット」は、子育ての情報交換や、友達を作りたという外国人保護者のニーズに応えようと立ち上げられました。ところが実際には、外国人の保護者と交流し、多様な文化や習慣を実際に見たり聞いたりすることで、日本人の保護者が子育てをもっと自由にとらえられる視点をもてたりするのかなと思ったりがありました。世界と出会い、いろんな人がいることを知るから、「こうあらねば」というところから、自分自身ももっと自由にな



れて生きやすくなるのではないかと
思っています。

若者が外国人の人と出会い、交流するのにも、そういうことを得られる1つのチャンネルなのかもしれません。

キーパーソン

2

京都府国際センター
外国人留学生等支援員（コーディネーター）

谷川 拓巳氏

●留学生就労支援を通して 見えてきた共感への取り組み

2006年外国人留学生就職のアドバイザーとして京都に来ました。留学生が何故日本を選んだのか、日本で何をしたいのか、生活のことも含めたアドバイザーでありたいと思っています。

みんな一人で来て、必死で生活しています。「家（日本での住居）が一番いい。ホッとします」という声



も聞きます。みんな強いわけでもなく、不安な中で生活しているのを実感します。

就職面では、留学生の持つ個性や希望と就職できる枠組みにずれがあることを強く感じています。「出入国管理及び難民認定法」（以下入管法）のため、働く枠組みが限定されているのです。もう少し就職の枠を広げてほしいと考えています。期限的な縛りもあり、就職できないと1年（卒業後6ヵ月×2回申請の特定ビザ変更・ある大学は「卒業後の特定ビザの大学推薦状を発行しない」卒業後即帰国）で母国へ帰らなければいけません。私自身何度も枠組みの壁にぶつかり、悔しい思いをしました。日本で漫画を描きたいといった想いに、「入管法」は応えてくれませんが（専門性）。より良い就職先とのマッチングを思えば、卒業後せめて1年、有給もしくは手当のつくインターンシップ（現在日本は非労働）のキャリア就業体験と企業研修プログラム参加を提案したいと考えています。

「ここには、「仕事を辞めたいんです」「辞めたんです」という元留学生が多くやってきます。「4月に就職したの
では？」半年足らずで辞めてくるこ



ともあり、企業がグローバル化しないと働き続ける職場として無理があります。疲れ果てて母国へ帰ってしまいう元留学生も見えました。課題は外国人留学生が日本での経験を活かしたキャリアプランを明確にもっていないこと、日本企業が外国人を採用後どのように活用していくか具体化されていないことだと解ってきました。これらは、国の高度人材の日本定着という政策と相反する流れになっている大きな問題であり、早急に対策を講じる必要性があります。



●相談に来ていた、元留学生 Rさんに話を伺うことができました。

最初は、泣いて相談に来たそうです。京都の大学を卒業し、貿易会社に就職。3年目の今夏、仕事を辞め、幸運なことに、3か月で再就職できたという報告にきました。

「辞める前に再就職先を決めてから辞めることをお勧めします」と谷川さんからアドバイスを受けていましたが、結局辞めてから再就職先を探すことになりました。

貿易会社なので、国際的な仕事ではありましたが、事務職で思うような活躍ができませんでした。朝8時から夜10時まで。仕事をしながらほかの仕事を探すのは時間的、体力的に無理だったといえます。

「会社と家との往復だけ、休みの日は身体を休める事に使い、プライベートな時間は取れなかった。いろんな人とながりが持てない。結婚のことも非常に気になる。自分の時間を持つことが全くなかったです。辛かった」と打ち明けてくれました。

（村井）

京都市地域・多文化交流ネットワークサロンは京都市南区東九条にあります。地域のまつり「東九条マダン」は今年で24回を迎えました。東九条マダンでは、朝鮮半島の楽器を、韓国・朝鮮人も、日本人も、今ではフィリピン人も一緒に演奏しています。ネットワークセンターの中には児童館、向かいには保育園があるので、在日の友達を本名で呼んだり、友達の親を〇〇のオンマ（お母さん）、〇〇のアッパ（お父さん）と呼ぶことが、日常の中にあります。東九条マダンや、ネットワークサロンなど、多様な背景をもつ人々が集まる環境で子育てできることを、私自身も幸せに感じています。



(写真 東九条マダン実行委員会提供)

●愛だけでは届かないこともある

『多文化社会を生きるⅡ』を発売したことを紹介したいと思います。日本で生まれ育ち、日本語は全く問題ないと思われるフィリピンルーツの子どもたちが、生きづらさを感じている場面に会うことがあります。その子どもたちは、日本語が得意ではない自分のお母さんと、深く話し合うことができなかったり、自分のこころの中で感じていることを表現することが苦手だったりします。中学校、もしくは高校を卒業した途端、社会についていけず、仕事が続かない、悪い仲間にもまれる、ということもあります。この冊子は、ネットワークサロン講座「外国につながる子ども」のことは



とこころ／生きぬく力をはぐくむ学校・家庭・地域の役割」の講演録で、考える力や心を見わたす心を育てることの大切さを伝えていきます。まずは親の気持ちが一番伝わることは（母語）で育てることを薦めています。そのことばが、子どもの考える力や、心を見わたす心を育てるということ、またそれは、青年になってからでも育てることができると書いてあります。保育、教育、または子どもたちの支援に関わっておられる方々に、ぜひ読んでいただきたいと思えます。



●共に生きる

日本社会で人権が守られていない事例があまりにも多くて、多文化共生は、とてつもなく遠く感じることはです。今は、東九条地域で人のつながりを大事にしながらがんばっています。互いに支え、支えられ、共に生きる街に近づいてきたように思います。

若者×多文化共生
今、多文化が共生する
ということ

多様性こそ力 共生こそ希望

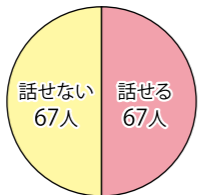
多文化・多様性を尊重するとお互いの「ちがいが」がぶつかりあう場面がおこります。ぶつからないように距離をとることは、「ちがいを認めあう」のではなく、おたがいを「避け、関わり合おうとしない」ことであり、共に社会を生きるあり方とはいえないでしょう。必要なことは、「ちがいを認めつつ積極的に関わり合おうとする」ことであり、「ちがいを」どう向き合うかが重要になります。

「ときめき」・「京都にほん」Rings」などの機関やネットワークに参加しています。若者が多文化共生プログラムの活動を通して考えたり行動したりすることで、他者を慮ることのできる感性を身につけた大人へと成長していることを実感しています。これからもそういった感性を持てる若者が多く活躍できるような伏見青少年活動センターを目指します。

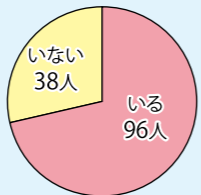
今回は、「多文化が共生できる社会づくり」を推進してきた3人のキーパソンにインタビューをさせていただき多文化共生社会の一つの価値としてある他者を慮ることへの発見や気づきがあれば幸いです。

ふしみん（伏見青少年活動センター）を利用している中高生・大学生・社会人
134名にインタビューしました！

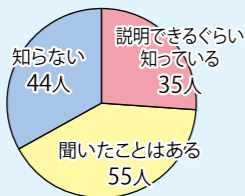
外国語を話せますか？



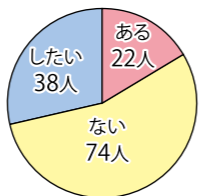
友だちに外国にルーツをもつ人はいますか？



ヘイトスピーチとは何か知っていますか？



留学をしたことはありますか？



意外にも、外国にルーツをもつ友達がいる若者が多いという結果に。サークルの仲間やクラスメイトに「外国のことを知ること大事、でも我が国日本のことをごれぐらい知っているのか？」ということ、ニュースで一時期多く取り上げられ

ていたヘイトスピーチについても聞いてみました。あなたはこの結果をどう捉えますか？ アンケートにご協力いただいた青少年の皆様、本当にありがとうございました。

(井上)

伏見区は、外国にルーツを持つ住民が比較的多いこともあり、伏見青少年活動センターは、事業の柱の一つとして多文化共生の啓発を掲げています。「伏見にほんご教室」、「国際交流カフェ」、「多文化共生きほんのき」などのプログラムを実施するとともに、「京都市多文化施策審議会」

特集担当 伏見青少年活動センター 村井繁光・井上理紗

(村井)